贖罪の哲理

宗教は事實なり經驗なり、我儕は聞また見、懇切に觀、わが手捫(さわ)りし所のものを曰ひ、且つ信ずるなれば、其哲理の如何は我儕の信仰を動かすべきにあらず、幾尼涅(キニーネ)の作用に關する病理學上の學說如何は其下熱劑たるの效用を少しも減少せざるが如く、救罪力として福音の效果は哲學上の解析如何に據らざるなり、我儕の信仰は背理的たるべからず、然れども神は直感を以て感じ得べきものにして推理的思考の結果として得らるべきものにあらず、一見百聞に若かず、宗教を了得するには「第六感」の作用と發達とを要す。

故に余は茲(ここ)に贖罪の哲理を攻究するに當て先づ讀者の注意を乞はんと欲する事は余の解析如何に依て事實其物を判斷せられざらん事是なり、事實は事實にして解釋は解釋なり、事實は自然にして神のものなり、解釋は余の解釋にして人のものなり、前者は萬世に涉る萬人の實驗に依て證すべく、後者は時と思考者の腦形とに依て變ずべし、さればにや贖罪の哲理(Rationale)に就ては古來より今日に至るまで幾多の假定說(教理と稱せらる)が提出せられたり、或は曰く人類は惡魔の擒(とりこ)となりたれば神は其子を贖代(しよくだい)として惡魔の手に渡し、人類を己が手に取戻せりと、曰く神と人との間に調和を失ひたれば、神人兩性を備へたる基督は兩間の中保人(ちゆうほにん)となりて平和を回復せしなりと。曰く神の公義は罪人が罰せられずして赦さるゝことを許さず、故に神は自ら人類の罪を負ふて彼を信ずるものゝ罪を赦すの途を開けりと、曰く人類は神の愛と慈悲とを忘れ、自ら悔改の途を塞ぎたれば神は基督に於て顯れ給ひて吾人の信仰を助け、神に歸るの途を開けりと、實に基督贖罪論は三位一躰論と共に神學上議

論の焼点(しようてん)にして今日に至るも未だ何人をも満足し得る定説あるを聞かず。然れどもその背理ならざるの證はその是を何れの方面より攻究するも之を合理的に考究し得るにあり、而して今日迄提出せられし贖罪の解析にしても満足なるものなしとするも、亦幾分の眞理を含有せざるものは稀なり、贖罪若し神愛の絶頂なりとせば能く之を了會し得るものは宇宙の廣きが如き博き智と、神愛の深きが如き深き愛とを有するものならざるべからず、我等の智識は全からず、余は救罪の奥義は何處に存するやを知らずと雖、若し余にして此奥義を窺ひ知り得るに至らば、これ使徒保羅が彼の奇跡的の智能を以て羅馬人に書き送りし書簡の中に彼の註解を試みし以來、基督教二千年間の史上に於て幾多の聖者の腦漿に上りし解析を總合(Sum total)せしものならむと信ず。

余が十字架上の耶蘇を見し時始めて罪の荷擔(かたん)を脱するを得しは抑々(そもそも)何の理由に依るや、余は茲に簡短明瞭にして救靈の奥義を一括する哲理を述ぶること能はずと雖も、余は余の大傷の癒されし理由を考へ見んと欲す。然れども讀者よ、同一の藥品が異種の病に適することあるもその作用に至りては病に依て異るが如く、我の病を有せざる人が我が如く感ぜざるは理の最も見易きものなり、我の理由必しも汝の理由ならざるべし、余は前以て斯く述べ置くなり。

此問題を攻究するに當て先づ余輩の注意すべきは眞理探究の途として信仰なる能性の缺くべからざる事是なり、聖アウガスチン曰く「信仰とは吾人の未だ見る能はざることを信ずるにあり、而して此信仰の果報たる吾人の信ぜしことを見るにあり」と、余は見ずして信じたれども信じてより見るを得るに至れり、余の十字架を信じ能はざりしは其理由を解せざりしに依れり、余は思へり若し十字架の代贖にして充分に理解し能はざるものならば余は

如何にして之を神經病的の「リバイバル」より區別し得るや、余は合理的の宗教を求むるものなれば理を解せざる事實を信ずる能はず、余は寧ろ眞理を信じて困(くる)しむも迷信を信じて安逸を求めざるべし、Better one year of Europe than a cycle of Cathay,(歐洲動搖の一年はカセイ千年の無事に勝る)、余は眞理を犧牲に供して平安を求めざるべし」と。

然り然れども余は此宇宙間には信仰を以てのみ知り得る眞理の存在する事を忘れたり、而して諸ての智識の土臺なる物の自然(the nature of things)は信仰に依てのみ知り得るなり。何故に薔薇は香ばしきや、其花蕊(はなびら)に香油の存すればなり、何故に香油は香ばしきや、是推理の終局なり。葉綠(クロ・フヰル)の青きは其成分を知ればとて解し得べきにあらず、葉綠は青ければ青しと言て止まるのみ、然ども一度葉綠の青きを知てより植物界の現像を思ひ見れば、松の鬱蒼たるも解し得べし、楓の血紅たるも解し得べし、アルプスの深綠、アンデスの薄藍、皆な單純なる葉綠粒の變幻なるを知るに至る。

造化を見も又如斯、神を神と信じてのみ宇宙は一中心の周圍に回轉する一大機關たるを知るを得るなり、眞理は眞理其物の證なり、神の神たるを證するものは神を除て他に存するなし、神に向て汝の存在の證を與よと言へば我は我なり(I am that I am)と答へ賜ふより外なし、物の自然を信じて素めて其物に關する智識あり、宇宙存在の始大原因なる神を信ぜずして宇宙を解し得るの理あらんや。哲學者ライプニッツ曰く

心靈以外のものにして直接に知認し得るものは神のみ、感觸を以て探るべき外物は皆悉く間接にのみ知り得べし、

然らば迷信(Superstition)と信仰(Faith)との別何處に存するや、理を究めずして信ずればこそ鰛の頭を崇めらるゝにあらずや、神てふ感念は迷信家の熱頭中に描かれたる妄想ならざるの證は何處にあるや。

信じて而して眞理益々明瞭なるを得る之を信仰と云ひ、益々闇黑を加ふるに至る之を迷信と云ふ、眞理は我の自然性と調和するものなるを以て之を信ずれば我が全性の歡喜と贊成あり、誤認は我自身の和合を破るものなれば我が善性の全部或は幾分かを壓せざるべからず、充分なる滿足は眞理を了得せし時の徵候なり、われ眞理を會得する時、我の理性も情性もアーメンと應へ、山と岡とは聲を放て前に歌ひ、野にある樹はみな手をうたん(以賽亞(イザヤ)五十五章十二節)アルキメデス比重量の標準を求め得て裸躰躍り出て衆に告げ、シヤムポリオン假說を設けて「ロゼツタ」石を譯解せしよりパロの木乃伊(ミイラ)再び物を語る、我の眞理に達せんとする時、我の心に存する眞理は叫て言ふ「彼女は我の姉妹なり」と、靈、靈に應じ、眞理、眞理と婚す、天の許せし夫妻は人の以て離別し得べきにあらず、眞理、眞理を戀(した)ひし後は合せざれば止まず。

For deep love unsatisfied is the hell of noble hearts and a portion for the accursed, but love that is mirrored back more perfect from the soul of our desired doth fashion wings to lift us above ourselves and make us what we ought be. — Rider Hagard.

迷信信仰の別此の如し、然り我は我が牧者の聲を知るなり。

福音書の記載する基督の言行錄が特種の引力を以て罪に困しむ人靈を彼に引き附る所以は全く此に存することと信ずるなり、基督は心靈の新郎(はなむこ)にして新婦(はなよめ)の「インスチンクト」は直に問はずして彼の眞夫(しんぷ)たるを知る、眞理

を探るに至つて此種の能性は決して輕ず可らざるなり。

“ Whose (man’s) halting wisdom after knows,
What her (woman’s) diviner virtue fore discerns.”

われ我が罪を悔ゆると雖も我を赦すの神なかりせば如何せん、放蕩子悔いて家に歸るとも彼を見て憫(あはれ)み趨(はし)り往き其頸を抱て接吻する父のなかりせば彼は何の面目と勇氣ありて父の許に來らんや、我は我の罪に耻て神に歸る能はず、我の心に存する罪は我を遮(さえぎ)て我の神に歸するを許さず、人類は已に神の面前より逐はれしものにして旋轉(まわ)る焔の劍は生命の樹の途を守れり(創世記三章廿四節)、神若し我を救はんと欲せば彼より我に來らざるべからず、われ罪を犯さゞりし前は正義の神は我の友にして我は直に彼と交はるを得たり、然れども已に罪もて汚されし我は今は正義の神の光輝に堪へざるなり。純白の衣裳を着けたるものゝみ神の國に入るを得るなり、泥だらけなる我、傷だらけなる我、如何で彼の前に立つを得むや。

此に至て我は贖罪の必要を感ずるなり、卽ち我罪人が神に達し得るの途を欲するなり、罪人なる我が神と平和を結ばん爲には神は正義の神としてのみ我に現はれずして、慈悲の神、救の神として現はれざるべからず、彼の子供なる人類は自ら好んで罪惡の奴隷となりたれば、彼の愛をして此迷へる子供に普及せんが爲めには、神は救主として自顯せざるべからず。

基督が非常の引力を以て人を彼に引寄するは全く彼が此人性の大慾望を充たせばなり。

彼の道德の完全なりしは勿論彼が尊崇せらるゝ一大理由なるに相違なし、神の獨子なりとしては彼を嘲りしストラウスすら彼の行性を評して曰く「ソクラトスは人の如く死せり、基督は神の如く死せり」と詩人ゲーテの如く基督教を論ずるや常に皮想の見を以てし、惟美術的にのみ人世を解せし人すら基督の品性に就てはかく表白せり、

理性の發育は如何程進歩するとも、學術の研究は如何程緼奥(うんおう)を極むるとも、人智の開發は其極に達するとも、福音書中に輝く基督教の高尚なる道德が超越さるゝことは決してあるべからざるなり

基督の神性と奇跡とを批難する人も彼の高潔無垢の品性に就いて狂信家にあらざるよりは之を否むものあるを聞かず、宜なるかなユニテリヤン教徒の如く基督が救主たるの理由は單に彼の完全無缺の品性にありと信ずるものありとは。

高潔なる品性が救罪上の力を有する事は論を俟(また)ずして明かなり、英雄に一種の電氣力あり、われ彼に近けば彼の英氣我に感染す、倫理學を講ずるにあらずして活ける倫理に接する時は眞理の清流我に注入するを覺ゆ、ソクラトス最後の狀を讀む毎に釘もて机に打付けられし如く沈思默考石像の如く靜肅なりしベーコンあり、護良親王吉野籠城の記事を誦讀(ずうどく)して常に士氣を鼓舞せし藤田東湖あり、萬卷の書を以て教訓し能はざる粗暴男子も一度「ラグビー」校のアーノルド氏に接すれば終生離るべからざる溫雅の風を受くるあり、君子は實に活佛にして歴史は活ける哲學なり。

品性の模範として基督は最も完全なるものなり、人若し絶閒(たえま)なく基督の品性を見詰め彼に模(なら)はんと欲せば終に

彼の完全なるが如く完全なるを得べしとは或種の宗教家が熱く唱ふる處なり、（ヘンリー＝ドラモンド氏演説集中 The Changed Life の編を讀め）、基督の如くならんと欲すとの慾念こそ基督信徒の最大目的なり、而して基督を思ひ基督を學び以て益々基督に似るに至る事は疑ふべからざる事實なり。

然れども余に基督の如くなり能はざる大原因のあるあり、卽ち余には罪てふものゝ存するありて如何なる感化力も之を消滅し能はざるあり、余にして先づ罪より免からるゝにあらざれば余は基督の如く思ひ且つ行ふ事能はざるなり、基督の心を以て余の心となさんと欲せば先づ余の心に一大變化（性質上の）を來たさゞるべからず、基督の贖罪なくして人は基督の如くなり得べしと謂ふは石鹼と磨擦の作用に依て黑人も白皙人種となり得べしと謂ふが如し。

基督救世の業は二樣なりし、一は人類に完全なる生涯を敎へんが爲なり、二は人類の罪を彼の身に負て之を消滅せんが爲なり、前者は救世の最終目的にして、後者は前者に導くの必要手段なり、（彼得前書二章十二節）、完全なる人を作らんと欲せば先づ人を不完全ならしむる罪を除かざるべからず、何となれば人その罪より脫せざれば罪を犯さゞるに至らざればなり。

然れば何故に基督の死と苦痛とは彼を信ずるものゝ罪を滅するや、世に稱する贖罪なるものゝ哲理は何處に存するや、人は他人の苦痛に依て自己の犯せし罪より免かるゝを得るや。

此問題を攻考せんとするに當て余輩は先づ諸ての善人は贖罪的の性を有するものなることを認めざるべからず、人類は聯帶責任を以て共に繫がるゝものなり、一人の罪は人類擧て之を感じ、一國の失政は萬國の損害となる、

我の兄弟が罪を犯して我は責任なしと謂ふを得ず、我が同胞若し損害を他國民に加ふれば國民は擧て其責に當らざるべからず、罪なきものが罪あるもの〻罪を負ふにあらざれば其罪は消滅せざるべしとは天下普通の道理なり、米人利慾の奴隷となり、人倫の大綱を破り、賣奴の制を實行せしや、義人ジヨン＝ブラウンはハリス渡口の絞罪臺に於て罪祭の捧物として供へられたり、つゞひて五十萬の生靈は硝煙鼓譟の中に贖罪の血を注ぎ、而して二千萬の聖民の祈禱と克己勉勵との結果として漸く干戈を收るに至りしや、震怒の神は最終の罪の値として國父アブラハム＝リンコルンの生血を要め玉へり、然るに內亂の余弊は未だ是等義人の流血を以て洗淨する能はず、南北未だ怨恨の念を絕たず、兄弟墻に相鬩する時剛直の愛國者ジエームス＝ビー＝ガーフヒールドが正義の犧牲と成りて狂人の毒手に斃るゝや、國民始めて同胞相爭の非を悟り、半百年間の紛爭は全く跡を絕つに至り、公平なる共和政治はアレガニー山脈の全長に添て洽く、ミシシピの淸流は安らかに海に入るに至れり。

オレンジ公ウヰルヘルムの寶血は實に和蘭共和國を狂王フヰリップ第二世の手より救ひしものにして和蘭國三百年の隆盛は實に彼の殉死の功の然らしむる處と謂はざるを得ず。是を小にしては一家に放蕩子あらんか、父は彼が爲めに憂愁腸を斷ち、弟と妹とは慚恨寢食を忘れ、而して母は煩悶遣る方なく、心痛いや增して病を釀し、苦慮の極終に愛兒の名を唇にして命を終るや、岩石の如き愚子の心も始めて解け、闊然として悔悟し、天父の免を乞ふに至る。

無限の慈悲なる神が何故に人の血を人より要め給ふかは深遠なる祕密として存すべけれども、人を人と聯結し、人類を以て推察的の組織躰となさんが爲めには此聯帶責任こそ人類の最大必要なる事は日を見るよりも明かなり、

若しユニテリヤン教の唱ふる如く人はおの〳〵其荷を負ふべきものにして他人が彼の罪を負ふべきの理なしとの教義にして眞理ならしめば何故に無辜の黑奴は熱情なるガリソンの辛勞（しんらう）を要せしや、何故に可憐の瘋癲病者はドロテヤ＝デイックス（共にユニテリヤン教信者）の天使樣なる推察と勤勉とを要せしや、然り我は他人の罪を負ふべくして、他人は我の勞を任ひくれるなり（加拉太（ガラテヤ）書第六章二節）、我は之に依て我は我一人の我にあらずして我身に人類全躰の責任を負ふことを知る、我は我が鄰人の受くべき笞を我が身に受け、鄰人の痛を減じ得るを以て我は人たるの無上の榮光を有するなり。

人類社會は實に義士仁人の功德に依て成立するものなるが如し、義人の適宜なる比例は社會の存在に必要なるが如し、邦家の滅亡は策士の缺乏より來らずして正義者の數足らざるより來るなり、神アブラハムに告て曰く「我若しソドムに於て邑（まち）の中に五十人の義者を看ば其人々のために其處を盡く恕さん」と、古昔より今日に至るまで德盛に正義行はるゝ邦國にして敗亡に歸せしものあるは余輩の未だ曾て聞かざる處なり。

生命の父なる神は人類の全滅に至るを好み給はざるを以て絶へず高潔の人を世に降し其腐朽を癒し其不淨を排ひ給へり、人類社會の生存は實に絶間なき精氣の注入を要す、義人アベルが兄カインの毒手に斃れてより以來社會の腐蝕は啻に義人の寶血（ほうけつ）を以てのみ止められたり、而して神が人類全躰の大傷を癒し、地球と之に棲息する人とをして全能の意志に定め置き給ひし幸連の位置にまで引上げんと期し給ふや、神自ら肉躰を取て此濁世に降り無窮の德源を此所に開き給ひしとの音は、愛なる神の存在と、人と神との關係とを了知する者に取ては決して信じ難き音にはあらざるなり、曾て希臘の古哲が彼の時代の腐敗を看て「天の神自ら來て世を救ふにあらざれば此世

は決して救はれざるなり」と歎ぜし言は人性自然の發言と云はざるを得ず、世を救はんが爲には神の降世を要せずして義人英雄の輩出にて足るべしと信ずる人は國賊猖獗を極め、天兵威を振はざるに際し、猶も天子の御親征を不必要なりと云ふものなり、奸佞の國土に蟠るあり、聖天子の民を愛するあり、御親征は民の渇望する處にして亦聖意の存する處なり、節刀錦旗已に賊膽を寒からしめたり、竜躰親しく陣に臨み給ふ、寇敵の鏖滅日を待たずして期すべし。

神昔は多の區別をなし多の方をもて預言者により列祖に告給ひしが、この末日には其子に託て我儕に告たまへり、神は彼を立て萬物の嗣とし且つかれを以て諸の世界を造りたり、彼は神の榮の光輝その質の眞像にて己が權能の言をもて萬物を扶持われらの罪の淨をなして上天に在す威光の右に坐しぬ、彼が受し名の天の使者の名よりも愈れる如く彼等よりは愈れり、

（希伯來書一章一―四節）

無限の仁愛世に臨めり、其德流流れて永遠に至り、此世が化して天國となるの基は神の子耶蘇基督の降世に依て開かれたり。

人の贖罪力の多寡厚薄は彼の品性の高卑と竝に彼の身に引受くる苦痛の嚴寛とに正比例なり、罪人若しその犯せし罪の罰として適當なる刑に行はるれば彼の苦痛は一の贖罪的の功を有せず、何人も彼の所刑に依て積極的の利益を得ることなし、然れども爰に竊盗罪を犯せしものありて裁判官の不正よりしてか或は辨護人の不親切よりして强盗罪の罰を受けしとせんか、彼の所刑は衆人の憐む處となり、その影響は終に判官或は辨護人の身に及び、彼等をして不正不實を後悔せしめ、後來を愼み再び前轍を踏まざらしむ、此に於てか不當の所刑は他の罪人を不

當の刑罰より救ひたり。

今例を變じて全く無罪のものが强盗罪の刑に處せられしとせん、彼が裁判人と社會一般に及ぼす感化力は前例の比にあらず、而して一歩を進めて此刑罰に處せられしものは罪なき人なりしのみならず義人なりとせんか、彼の贖罪力は彼の善行の著しかりしと彼の受けし刑の重かりし比例に增加するものなり、無辜の賤民誅戮せられて小吏掠奪を止め、義農宗五郎磔せられて佐倉の鄕民虐政を免かる、會藩の歸順は三老の切腹を要し、維新事業の實成は甲東參議の血を以て封せらる、ラチマー(Hugh Latimer)燒殺せられて殘忍なるマリヤの勢力頓に衰へハムプデン戰場に斃れてスチユアート家の衰運已に定まれり、義人の死に勝る勢力の世に存するなし、死せる孔明生ける仲達を走らす、萬軍の以て斃す能はざる虐王奸臣も義人の死に依て斃れざるはなし、罪は苦痛を以てのみ消滅し得べし、血を流すこと有ざれば赦さるゝ事なし。(希伯來書九章廿二節)

或人曰はむ「神は無限の愛なり、神我儕の罪を赦さむとならば贖罪の途を經ざればとて彼の特權を以て我儕を赦し得るなり、我儕父母たるものは其子が罪を悔い來て免を乞ふ時直に其咎を赦すにあらずや、況んや神に於てをや、贖罪の事たる亞細亞的專政君主が其下民を罰せんとするに當て或る嬖臣(へいしん)の仲裁と哀訴とに依て其罪を赦すに類する處置にして神に關する最も野蠻的の思想と謂はざるを得ず、單純高尙なる神の思想は贖罪の迷愚を棄卻せざるべからず」と。

實に然るか、我儕(われら)父母たるものは實に理由なくして我儕の子供の咎を赦すか、勿論未だ左右を辨(わきま)へざるものゝ罪は未だ罪と稱すべきものにあらず、然れども已に罪の罪たるを知る子にして罪を犯す時は適當なる理由なくし

て彼の罪は赦すべからざるなり、而して嚴父は決して然かせざるなり、是父たるものゝ威嚴を存するが爲に必要なるのみならず、亦子たるものゝ意志の自由を重ずればなり、理由なくして其子の罪を赦す父は其子を愛せざる父なり、彼若し父たるの特權を以て子を赦せば其結果は一家の不取締となり、其子の公義心を鈍からしむ、眞正の愛は慈悲と正義との結合なり、吾人法律的の感念が基督の十字架の死を以て人類の罪を赦さんが爲に神の公義を滿足せしものと見做すに至りし事は決して理由なきにあらざるなり。

贖罪の適例として常に擧げらるゝ事實は羅馬の歴史家バレリウス＝マキシムス(Valerius Maximus)の記事に係る希臘王ザリユーカス(Zaleucus)の事跡にして天道溯原(てんどうさくげん)著者の筆に成るものは左の如し、

昔希臘王有二新例一作姦者無レ論二貴賤一必刺二其雙目一成レ瞽以爲レ罰不レ料定レ例後皇子偶犯二淫行一、王聞レ之不レ勝二憂慮一、若不二按レ例加一レ罰既恐下民有二伺レ親廢レ法之論一而民心上不レ服、若按レ例加レ罰、則已盲二其目一、不レ能レ臨二理天下一而社稷無レ主、事在二兩難一、不レ得レ已以二己之一目一、易二其子之一目一、上以循レ例、下以全レ情、夫皇子不レ得三苟免二於刑一、王猶爲レ之共受二痛楚一、既仁義之兩全、民自感二其德一、而服二其敎一、

人類的を以て誇稱する近來の或神學者は此種の實例を以て已に時世後(おく)れのものとなし、法律的の贖罪論は背理逆說として受けざるに至れり、余輩は茲に古說の辨護を試むるの余白を有せずと雖も、一事讀者の注意を乞ふべきあり、卽ち所謂人類的思想の進步は延て法律的思想の緩慢を生じ、愛と慈悲とを混同し、愛をして愛たらしめざるに至りしこと是なり、惡を憫むと稱して惡を憎まず、苦痛を見るに堪へざる肉慾的の感情に支配せられて正義を實行することに躊躇するは此十九世紀文明の婦女的の弱點たるは識者の已に識認する處なり、一世紀以前に

於ける貴族の獵場内に於て兎一疋を殺すものは死刑に處せられし不情不義に反して今は公然たる詐欺も白晝の盜賊も證據不充分の一言の下に無瑕の人と成るを得るに至れり、是を今世人の法律的感念の癡鈍と謂はずして何ぞや。

眞正なる悔改は嚴格なる法律の下にのみ起り得るなり、罪の罰より免かれんとするは眞正の悔改にあらず、法律的の償贖を示さるゝにあらざれば赦免の宣告に接するとも之を信ぜざりしルーテル、バンヤン輩の直實なることは放緩と寛容とを混同する軟神學者の推量し能はざる處なるべし、是ヘンリー＝マーチンの稱する「寛大なるべけれども基督教的ならざる精神」(Liberal but not Christian spirit)にして神愛の深さと廣さとを了知するものと謂ふべからず。

「罪の赦」とは赦すものと赦さるゝものとの相互の働作より來るものなり、赦さるゝものは只に後悔の感念を以てすべきのみならず悔改に符ふ果(馬太傳三章八節)を以てせざるべからず、而して赦す者も亦只に心に赦すのみならず放赦の實(贖罪)を以てせざるべからず、悔改の實と放赦の實と兩ながら擧て素めて罪は赦さるゝなり、神は悔改の果を結ばざる罪は赦し給はざるが如く、我等も放赦の證明なき赦免は信じて受くる能はず、之我等の信仰の足らざるに依て然るにあらずして我等に存する天與の理性が請求する處なり、新約聖書が重きを神の契約に置くも此に存するなり。

而して基督の生涯竝に十字架上の死は神が人類の罪を赦し玉ふの證明なり、卽ち基督の贖罪とは神に於ける罪の赦の實なり。

夫れ贖罪の原理たるや自然界普通の理なり、礦物界に於ては之を動力の平均(Equilibration of Forces)と云ひ、生物界に於ては治癒の作爲となりて顯はれ、心靈界に於ては贖罪となるなり、空氣中に氣壓の稀薄を生ずる所あれば四面の空氣は平衡を得むが爲に此所に向て進入し、氣壓全く平均を得て氣躰の流動素(はじ)めて止む、即ち厚濃(かうのう)なる部分は稀薄なる部分の爲めに空氣の幾分を供したり。

樹木其一枝を失へば全木之が爲めに苦しみ、各枝各葉其養汁の幾分を放捨し、損所(そんしよ)を癒さむことを勉む、而して自覺の性を有する心靈界に於ては援助推察は道德的義務として存す、故に我等の中に一人の苦痛を感ずるものあれば社會全躰は彼と共に苦しみ、我等の快樂の幾分を殺(そい)で被難者を救はざるべからず、社界一局部の損害は全部之を負擔せざるべからず、健康部の犧牲に依てのみ疾病部を治療し得るなり、人類は肉躰を以て物質界と聯續すると雖も靈魂を以て心靈界の一部分を形造(かたちづく)るものなり、神と天使と人類とは靈界組織の機關(Members of spiritual kingdom)なり、故に人類の墮落と罪惡とは神と天使とに影響せざるを得ず、人類は救はざるべからず、而して之を救ふものは絶對無限の靈なる神自ら人の爲めに苦まざるべからず。

まことに彼はわれらの病患(なやみ)をおひ、我儕のかなしみを擔(にな)へり。

我若し腕に大傷を負へば我の心臟と胃と肺とは異常の働作をなして之を癒すが如く、地球表面億萬の人靈が死せんとするに當ては靈なる神は異常の働作を以て罪を贖はざるべからず、是奇跡なるが如くして自然なり、異例なるが如くして普通なり。驚くべくして當然なり。

勿論基督の肉躰上の苦痛は彼の心靈上の苦痛を表せしのみ、赦罪の恩惠は彼の神經的の疼痛(たうつう)によりて來るにあ

らずして心靈的の憂愁によりて來るなり、カルバリー山にあらずしてゲスセマネ園こそ人類の罪の贖はれし所なり、基督に棘の冕(かんむり)を被(かむ)らしめしものは我の罪なり、彼に苦き盃を飲まさしめしものは我の罪なり、彼を十字架に釘たせしものは我の罪なり、天主教徒が常に十字架形を身に纏ひて基督を思ひ、誠實なる新教徒某が常に十字架上の耶蘇の像を机上に置き「汝の罪が基督に此苦痛を與へたり」と獨語して己の罪を責めたりとは迷信邪說として悉く排すべからざるなり。

汝尙ほ余に問て曰はんか「何故に神は自ら苦しまざれば人を救ふこと能はざるか」と、余は汝に問はん何故にハワードは彼の英國の居寓に安居して歐洲の監獄を改良し能はざりしか、何故にリビングストンは彼の故國に於て黑人の爲めに熱心なる祈禱を捧ぐるのみにて亞非利加(アフリカ)を救ひ得ざりしか、罪を贖はずして罪を救はんとするものは貧者に食と衣とを與へずして汝安然なれと云ふものなり(雅各(ヤコブ)書二章十五、十六節)、行なき信仰は死せる信仰なるが如く贖はざる罪の赦は虛言なり、基督の十字架は神愛の實證なり。

基督の死に依て神は身を神に托する(Be-lieve, leave) 卽ち信ずるものを赦すを得るに至れり、神は赦し度きものを赦し得るに至れり、(神は何事をも爲し得べしと雖も正義に合はざる事は爲し能はず)、故に基督は人の爲めにのみ生命を捨てずして神の爲めにも死し給ひしなり、基督は血の流るゝ手をひろげて人類に悔改を勸め給ふと同時に、神をして人類の悔改を納めて彼等を赦すの途を開きたり、基督の十字架は實に恩惠の新泉源(しんせんげん)を開きたり、神は基督に依て尙一層の神愛を自現し給へり、基督曰く

我もし地より擧れなば萬民を引て我に就(きたら)せん若(我)ゆかずば訓慰師(なぐさむるもの)なんぢらに來らじ

と、人類が神に來らんとするも神が彼に來るものを受納(うけいれ)んとするも、先づ神の子は十字架の死を受けざるべからず、之れ聖經の明白なる教義にして吾人の理性と情性とが共に請求する處なり。

ユニテリヤン教并に「新神學」が贖罪論に反對するの大理由は贖罪論は意志の自由を否定し、個人的責任を取り去ると云ふにあり。

然れども余輩は意志の自由を否定せざるなり、我を基督に託すると託せざるとは全く我の自由にあり、我の基督てふ不可謂(いふべからざる)神の賜物を受くると受けざるとは全く我の撰擇に依るなり、我は我の自由其物をさへ全く神に捧げまつるも之亦我の自由なり、Our will is ours to make it thine 我の義を以て神の前に立つか或は全く我を殺して(Selbstödtung)神の義を以て義とせらるゝか之亦我意志の自由を以て撰ぶなり、我若し歩行して東海道を上るにあらざれば我の意志に依て上京せしと云ふ能はざるか、我れ文明の恩澤(おんたく)に預かり、我が身を機關師の鐵槌に任かし、快樂と平安の中に短時間内に我の旅行を終りたればとて我は我の意志の自由を失はず、亦怠惰怯弱(きよじやく)を以て我を嘲るものはあらざるなり、我は意志の決斷に依て脆き我の意志と行爲とに憑らずして我が全身を擧げて基督に任かせしなり、我を我が旅行先迄送り屆けしものは機關師なり、我を機關師に委ねしものは我なり、我を救ひ我を天國に送り屆くるものは基督なり、我を基督に托せしものは我なり、是れ聖經に所謂信仰(依頼)を以て救はるゝとの意なるべし、故に贖罪の教義は之を信ずるものをして無責任たらしむとの批評は全く據る所なき評なり。

亦贖罪の教義は道德觀念を排除すべしと云ふ人は未だ贖罪の目的を解せざる人なり、伊太利の山賊がアペナイン山中に旅人を殺して其財貨を奪ひ、然る後國法に處せられん事を怖れ、羅馬に到り彼が强取せし寶貨の一分を

寺院に寄附し、法王の捺印ある免罪狀を受くれば警官は彼に手を觸るゝことを得ざりしとは中古時代の昔話なり、基督の贖罪若し如斯ものなれば實に治世の大害物にして一日も社界に存すべきものにあらず、基督は我が罪を死を以て贖ひ置き賜ひたれば我は善事を爲すに及ばず、又惡を行ふも危險なしと信ずる人は未だ基督の贖罪に與からざる人なり、

然れば我儕何を言んや、恩の增ん爲に罪に居べき乎、非ず、我儕罪に於て死し者なるに何でなほ其中に於て生んや

（羅馬書六章一、二節）

贖罪の目的は我を完全なる人となすにあり、而して我が基督の贖罪に與かるに至りしは我は親ら勉めて完全なること能はざればなり、故に贖罪は道德の終局なり、道德の終る所是れ宗教の始まる所なり、宗教は道德の上に建てり、道德の粹是を宗教と云ふなり、創めに摩西の律ありて後に基督の恩惠あり、未だ律の嚴格なる綱を以て己を縛りし事なき人は基督なる放免者の恩惠に與かり得ざる人なり。

世に贖罪の教義を以て自己の不德を蔽はんとするものあるは實に歎ずべき事なり、然れども是れ教義其物の罪ならざることは余輩の辨を待ずして明なり。

高尚なる眞理は盲者の玩弄する處となるは何人も知る處なり、自由思想は佛國革命てふ悲戲を演ぜしめしとの故を以て排すべからず、プロテスタント主義は世年戰爭の源因たりしとの故を以て輕ずべからず、基督の贖罪は義と慕ふものゝ休所にして惡人の隱遁所にあらず、先づ舊約的の嚴重なる道德を教へずして直に新約的の柔和なる恩惠を說くものゝ自活の道を踐まざる子供に莫大の遺產を讓る愚父を學ぶものなり、如斯子供にして懶惰柔弱

無氣力なる者の多きは決して怪むに足らざるなり、然りと雖も謹直恭謙なる子供にして誠意以て父の志を繼がむと渴望するものに嚴父が與ふるに億萬の財産を以てすればとて吾人は父の不正を唱へず、又子の怠慢を慮からざるなり。

世には天性の善人なるものあり、卽ち生れながらにして圓滿なる性を有し勉めずして善良たり得る人を云ふ、或人曾てエモルソンを評して曰く「彼は生れながらの聖人にして天啓教の助を借らずして完全に最も近く達せし人なり」と、或は神聖なるプラトー(divine Plato)の如きあり、或は正直の現像なる孔子の如きあり、是れ人は基督の贖罪に與からずして完全に達し得るの證にあらずや。

此問題を充分に考究せんとするは此小著述の能く爲す能はざる處なり、然れども余は茲に二個の注意を讀者に促がさんと欲す、卽ち、一、基督教的の善人に一種異樣の特性の存するありて其溫其雅は希臘哲學も堯舜の遺訓も決して養生し能はざる事、二、當時基督教國にありて基督教の恩澤に與らずして善人たり得ると誇る人は大概熱信なる基督信徒の子孫にして、其人彼自身は直接福音の恩化に與からずと雖も其父其祖父其曾祖父に於て充分に基督教の感化を蒙りしものなる事是なり。

エモルソンの父ウヰリヤム、祖父ウヰリヤム、曾祖父ジヨセフ、五代目の祖ジヨセフは皆悉く牧會說教の職を主どりし人なり、ウエンデル＝ホルムスそのエモルソン傳に曰く「エマソン家の血統に教法師の多きは著しき事實なり」と、如斯祖先を有するエモルソンにしてプラトー、シエークスピヤを尊崇する事或は基督に勝しと雖も余輩は彼に基督教的の君子の風采ありしを決して怪まざるなり、若しエモルソンにして印度支那に生れん乎、彼

の教育と思惟の傾向は彼をして決して「新英國の聖人」たらしめざりしや疑ふべからざるなり、エモルソンが福音的基督教の庇陰に依らずして基督教的の君子たるを得しが故に何人も福音に依らずして彼の如く成り得べしと信ずる人は今日の米人は戰はずして獨立自由の幸遇に居るが故に何れの國民も改革時期を經過せずして自由獨立の國民たり得べしと妄想するものなり、合衆國民今日の自由は「モントフホルト」侯サイモンがイーブスハムの戰場に斃れしより以來、ハムプデン、チヤタム、ワシントン等無數の英靈が血を注ひで買ひ取し「サクソン」民族の自由なり、ユニテリヤン教が下瞰(かん)して以て迷信妄說と見做す贖罪の教義も亦彼等の祖先を罪戾(ざんれい)の苦より脫せしめ心靈上無限の自由を給與せし祕訣なりし事を忘るべからざるなり、エモルソン嘗て曰るあり、

余は曾て余の肉躰を以て余の靈魂の敵と思ひし事なし、余は實に自然の子供にして西瓜(すいくわ)が夏の日に太陽の光線に暴されて膨脹するが如く余も善良なる自然の擁護の下に心樂しく生長するものなり、と、

保羅は曰く、

善なる者は我すなはち我肉に居らざるを知る、そは願ふ所われに在とも善を行ふことを得ざればなり、われ願ふ所の善は之を行はず反て願はざる所の惡は之を行へり、若しわれ願ざる所を行ふときは之を行ふ者は我に非ず我に居るところの罪なり、是故に我善を行はんと欲ふ時に惡の我にをる此一の法あるを覺ゆ、蓋われ內なる人に就ては神の律法を樂めどもわが肢躰に他の法ありて我心の法と戰ひ我を擄にして我が肢躰の中にをる罪の法に從はするを悟れり、噫我困苦人なる哉、この死の躰より我を救はん者は誰ぞや(羅馬書七章十八—廿四節迄)と、

醫師の熟練を最も強く感ずるものは病者なり、特治藥(とくぢやく)の爲めに最も熱心に叫び求むるものは危篤患者なり、余の不完全極まれる性は余をして救罪を渇望せしめたり、――嗚呼神の奥義は深かな、神は遺傳と境遇と天性と幸運との作用に依て神の善人を造り得べく、亦遺傳に反し境遇に逆(さから)ひ天性を枉(ま)げ不運を轉じ罪人をも彼の子供となし得るなり、或人マホメットに問て曰く、

何が有にして何が無なるや、

答、神なり、世なり。

誰が人にして誰が禽獸にも劣るものなるや、

答、信者なり、僞信者なり。

何が最も醜にして何が最も美なるや、

答、信者の後悖なり、罪人の悔改なり。

若し哲學者ライプニッツの曰へる如く「人類の墮落ほど人類を高めしものなし」とせば、罪を犯せしものほど神の愛を感ずるものはなかるべし、然れば罪を感ぜざるものは基督の愛の深と高と廣とを感じ得ざるか、讀者自ら此問に答へよ、聖靈は直に汝に教へん。

讀者は余に問て言はん、「基督の十字架てふものは推理法に依て知るべからざるものなりとならば汝の之を信ずるに至りしことの何ぞ遲きや、之小兒も信じ得る眞理なり、十數年前の昔汝が洗禮を授かりし時此單元なる眞

理を信じ能はざりしか」と。

然り讀者よ、然れども君は未だ人類は最も單純なる眞理を最も後に知るものなる事を認めざる可らず、萬物は單元より繁雜に向つて進むと雖も人の思惟のみは繁雜より單元に向つて進むもの也、罪に沈める人間は外貌の虚飾を好むものなり、先づ外を改て而後内に及ぼさんとするは普通人の常態なり、余は社界風紀の改良に先じて國家經濟の增進に注目せり、眞率なる信徒の養生に先じて理想的基督教會の設立を計畫せり、余の靈魂の救はれざる先に聖人の行をなさんと勉めたり、然るに自然の順序に戻れる方法の一ツとして成功すべき理なければ、余の方策は悉く失敗なりし、而して失敗に失敗を重ね、失望に失望を加へし後、刀折(たうを)れ矢盡きて如何ともする能はざるに至りしや、「この苦しむもの叫びたればエホバこれをきゝ、そのすべての患難より救ひいだし賜へり」(詩篇卅四篇六節)、嗚呼人は窮せざれば眞理に來らざるが如し、余は曾て米國に於て或る武器製造所に至りしや、其支配人なる退職陸軍士官某余に近世の改良に係る大砲小銃を說明しくれし際、余は彼に問て曰く、「君に聞かん君は人類は何時戰爭を止むるに至ると思ふや」と、彼眞面目に余に答て曰く、「さればなり武器の改良充分に進歩して戰爭場に出るものは敵も味方も一人も殘らず打殺さるゝの怖懼を抱くに至らざれば人類は戰爭を止めざるべし」と、吾人が神に歸るも亦然あるに非ずや、(路加傳十五章を讀め)、金のある人、智慧のある人、然り德のある人は容易に十字架の耶蘇に來らざるなり、貧之人、無智のもの、罪人、嗚呼窮せざれば基督の酒宴(ふるまひ)に侍るものはなきが如し、

イエス彼に曰けるは、或人おほいなる筵(ふるまひ)を設て多賓(おほぜい)を請(まね)けり、筵のとき僕を其請ひたる者に遣して百物(すべてのもの)

はや備たれば來るべしと言せけるに、彼等皆同く辭ぬ、其始の者彼に曰けるは我田地を買たれば往て視ざるを得ず、願くは我を允し給へ、又一人の者いひけるは我五耦の牛を買たれば之を試むる爲に往ん願くは我を允し給へ、又一人の者いひけるは我妻を娶たり是故に往ことを得ざる也、其僕かへりて此事を主人に告ければ主人怒りて其僕に曰けるは速かに邑に衢巷に往て貧者、癈疾、跛者、瞽者などを此に引來れ、僕いひけるは主よ命の如く行り、然ど尙あまりの座あり、主人僕に曰けるは道路や藩籬の邊にゆき强て人々を引來り我家に盈しめよ我なんぢらに告ん彼まねきたる人々は一人だに我餐を嘗ふ者なし

（路加傳十四章十六節—廿四節迄）

然れども嗚呼神よ爾は何故に余が爾を求めつゝありしに門を開て余を迎へざりしや、余の路頭に迷ひし樣は爾の憐憫を惹かざりしか、余が眞理を見る能はざるより苦痛に苦痛を加へつゝありしを見て爾は手を束て傍觀するに堪へしや。

恵ある聲は答て曰く、神の忍耐は偉大なるかな、彼は彼の子供が苦しむを見て忍び得るなり、神が汝を救はざりしは汝を救はんと欲すればなり、半生閒の汝の漂泊煩悶は汝をして自己の念より解脫せしめ全く我に賴らしめんが爲なり、汝を苦しめしものは汝自身なり、我に凭たれよわれ汝の罪を贖ひ善より善に汝を導き、汝をして我の爲に世を救ふの力となさんと。

余答て曰く、

父よ然り、それ此の如きは聖旨に適へるなり

（馬太傳十一章廿六節）

贖罪の哲理　現代語訳

宗教は事実であり経験である。我々は聞き、また見、心を込めて観察し、自分の手で触れたことを言い、そして信じているのだから、その哲理がどうであるかは、我々の信仰を揺るがすことにはならない。キニーネの作用に関する病理学上の学説がどうであろうと、それが解熱剤としての効用を少しも減らさないのと同じで、救いの力としての福音の効果は、哲学的な分析がどうであるかに左右されないのである。我々の信仰は道理に反するものであってはならないが、神は直感によって感じられるべきものであって、推理的な思考の結果として得られるべきものではない。百聞は一見に如かずであり、宗教を理解するには「第六感」の作用と発達とが必要である。

それゆえ、私はここで贖罪の哲理を探究するにあたり、まず読者に注意をお願いしたいことがある。それは、私の分析がどうであろうと、事実そのものを判断しないでほしいということである。事実は事実であり、解釈は解釈である。事実は自然なものであり、神のものである。解釈は私の解釈であり、人のものである。前者は永遠にわたる万人の実験によって証明できるが、後者は時代や考える人の脳の形によって変わる可能性がある。だからこそ、贖罪の哲理（Rationale）については、古くから今日に至るまで、多くの仮説（教理と呼ばれている）が提出されてきた。ある説では、人類は悪魔の捕虜となったので、神は御子を身代わりとして悪魔の手に渡し、人類を御自身の手元に取り戻した、という。またある説では、神と人との間で調和が失われたので、神と人、両方の性質を兼ね備えたキリストが両者の仲保者となって平和を回復させた、という。またある説では、神の公義は

罪人が罰せられずに赦されることを許さないので、神は自ら人類の罪を負い、彼を信じる者の罪を赦す道を開いた、という。さらにある説では、人類は神の愛と慈悲を忘れ、自ら悔い改める道を閉ざしたので、神はキリストにおいて現れ、人々の信仰を助け、神のもとに帰る道を開いた、という。実際、キリストの贖罪論は、三位一体論とともに神学上の議論の焦点であり、今日に至っても、誰もが満足できる定説があるとは聞いていない。しかし、それが道理に反していないことの証明は、どの方面から探究しても、それを合理的に考えられることにある。そして、今日までに提出された贖罪の解釈にしても、満足できるものがないとしても、いくらかの真理を含んでいないものは稀である。贖罪がもし神の愛の絶頂であるならば、それを完全に理解できる者は、宇宙の広さのような広い知恵と、神の愛の深さのような深い愛を持っている者でなければならないだろう。我々の知識は完全ではない。私は救いの奥義がどこにあるのかは知らないが、もし私がこの奥義を垣間見ることができるようになったとしたら、それは使徒パウロが、あの奇跡的な知能をもってローマ人に書き送った書簡の中で、彼が解説を試みて以来、キリスト教二千年の歴史において、多くの聖者の頭脳に上った解釈をすべて総合（Sum total）したものだと信じている。

私が十字架上のイエスを見た時に初めて罪の重荷から解放されることができたのは、いったいどのような理由によるのだろうか。私はここで、簡単明瞭で、魂の救いの奥義をすべて含んだ哲理を述べることはできないが、私の大きな傷が癒やされた理由を考えてみたいと思う。しかし、読者よ、同じ薬が違う病気に効くことがあるが、その作用は病気によって異なるように、私の病を持っていない人が私のようには感じないのは、最もわかりやす

い道理である。私の理由が必ずしもあなたの理由ではないかもしれない。私はあらかじめこのように述べておく。

この問題を探究するにあたり、まず我々が注意すべきは、真理探究の道として、信仰という能力が欠かせないことである。聖アウグスティヌスは「信仰とは、我々がまだ見ることのできないことを信じることであり、そしてこの信仰の報いは、我々が信じたことを見ることにあります」と言っている。私は見ずに信じたが、信じてから見ることができるようになった。私が十字架を信じることができなかったのは、その理由を理解できなかったからである。私は、もし十字架の贖罪が十分に理解できないものであるならば、どうしてそれを神経症的な「リバイバル」と区別できるのだろうかと考えた。私は合理的な宗教を求める者なので、道理を解さない事実を信じることはできない。私はむしろ、真理を信じて苦しむ方が、迷信を信じて安楽を求めるよりも良いと考えた。「Better one year of Europe than a cycle of Cathay.（ヨーロッパの動揺の一年は、カセイ（中国）千年の無事に勝る）」。私は真理を犠牲にして平安を求めないつもりだ、と。

そう、しかし私はこの宇宙には信仰によってのみ知り得る真理が存在することを忘れていた。そして、すべての知識の土台となる物の本質（the nature of things）は、信仰によってのみ知り得るのである。なぜ薔薇は香しいのか。その花びらに香油があるからだ。なぜ香油は香しいのか。これは推理の終着点である。葉緑素が青いのは、その成分を知ったところで理解できることではない。葉緑素は青いから青いと言って止まるだけである。だが、一度葉緑素が青いことを知ってから植物界の現象を考えてみると、松が鬱蒼としているのも理解できるし、楓が血のように赤いのも理解できる。アルプスの深緑も、アンデスの薄藍も、すべて単純な葉緑粒の変化であること

を知るに至る。

創造を見てもまた同じである。神を神と信じて初めて、宇宙は一つの中心の周りを回る大きな機関であることを知るのである。真理は真理それ自身の証明である。神が神であることを証明するものは、神を除いて他には存在しない。神に向かって、あなたの存在の証拠を与えよと言えば、「我は我なり（I am that I am）」と答えてくださるより他にない。物の本質を信じて初めて、その物に関する知識がある。宇宙存在の最初の大きな原因である神を信じずに、宇宙を理解できる道理があるだろうか。哲学者ライプニッツは、言っている。

心霊以外のものにして、直接に知覚し得るものは神のみ、感触をもって探るべき外物はすべて間接にのみ知り得る

では、迷信（Superstition）と信仰（Faith）の違いはどこにあるのだろうか。道理を極めずに信じるからこそ、鰯の頭を崇めることになるのではないか。神という観念が、迷信家の熱狂的な頭の中に描かれた妄想ではないことの証拠はどこにあるのだろうか。

信じて、そして真理がますます明瞭になることを信仰といい、ますます暗黒を増すに至るのを迷信という。真理は我々の自然な性質と調和するものであるから、これを信じれば、我々の全人格の喜びと賛成がある。誤認は我々自身の調和を破るものであるから、我々の善なる性質の全部あるいは一部を抑圧しなければならないだろう。十分な満足は、真理を理解した時のしるしである。私が真理を会得する時、私の理性も感情も「アーメン」と応え、山と丘は、あなたがたの前で喜びの歌声をあげ、野に木々もみな、手を打ち鳴らす（イザヤ書55章12節）。

アルキメデスは比重の標準を見つけ出して裸で飛び出し人々に告げ、シャンポリオンは仮説を立てて「ロゼッタ石」を訳解し、ファラオのミイラが再び物を語るようになった。私が真理に達しようとする時、私の心に存在する真理は叫んで言う、「彼女は私の姉妹である」と。霊は霊に応じ、真理は真理と結婚する。天が許した夫婦は、人が引き離すことができるものではない。真理が真理を恋い慕った後は、結ばれずには止まらない。

For deep love unsatisfied is the hell of noble hearts and a portion for the accursed, but love that is mirrored back more perfect from the soul of our desired doth fashion wings to lift us above ourselves and make us what we ought be. — Rider Hagard.

満たされない深い愛は、高潔な心の地獄であり、滅びる者の運命であるが、望む相手の魂から完全に受け止められる愛は、我々を自身の上に持ち上げる翼となり、あるべき理想の自分へと創り変えるのだ。

— ライダー・ハガード

迷信と信仰の違いはこのようである。そう、私は自分の牧者の声を知っているのである。

福音書に記されているキリストの言行録が、罪に苦しむ人の魂を特別な引力をもって彼に引きつける理由は、まさにここにあると信じている。キリストは魂の花婿であり、花嫁の直感は尋ねるまでもなく、彼が真の夫であることを知る。真理を探求するにあたって、この種の能力は決して軽視すべきではない。

男性が迷いながら後になって知ることを、

女性のより鋭い直感はあらかじめ見抜くのだ。

私は自分の罪を悔い改めるとしても、私を赦す神がいなければどうすればいいだろうか。放蕩息子が悔い改めて家に帰っても、彼を見て憐れみ、走り寄ってその首を抱いて口づけする父がいなければ、彼はどんな面目と勇気をもって父のもとに来ることができただろうか。私は自分の罪に恥じて神のもとに帰ることができない。私の心に存在する罪は、私を遮り、私が神のもとに帰ることを許さない。人類はすでに神の御前から追放された者であり、回転する炎の剣が命の樹への道を守っている（創世記三章二十四節）。神が私を救おうと望むならば、神の方から私に来てくださるより他はない。私が罪を犯す前は、正義の神は私の友であり、私は直接彼と交わることができた。しかし、すでに罪で汚された私は、今や正義の神の光輝に耐えられないのである。純白の衣裳を着た者のみが神の国に入ることができる。泥だらけの私、傷だらけの私が、どうして神の前に立つことができようか。

ここにきて、私は贖罪の必要を感じる。すなわち、私のような罪人が神に達することのできる道を欲するのだ。罪人である私が神と平和を結ぶためには、神は正義の神としてだけでなく、慈悲の神、救いの神として現れなければならない。神の子である人類は自ら好んで罪悪の奴隷となってしまったのだから、神の愛がこの迷える子どもに及ぶためには、神は救い主としてご自身を現さなければならない。

キリストが非凡な引力をもって人々を彼に引き寄せるのは、全く彼がこの人類の大きな願望を満たしたからである。

彼の道徳の完全さは、もちろん彼が尊崇される大きな理由の一つであるに違いない。神の独り子であるとして

彼を嘲笑したシュトラウスでさえ、彼の生涯を評して「ソクラテスは人のように死んだが、キリストは神のように死んだ」と言っている。詩人ゲーテのように、キリスト教を論じる際には常に皮肉な見方をし、ただ美術的にのみ人生を理解した人でさえ、キリストの品性については次のように述べている。

理性の発育がどれほど進歩しようとも、学術の研究がどれほど深奥を極めようとも、人知の開発がその極に達しようとも、福音書の中に輝くキリスト教の崇高な道徳が超えられることは決してあるべきではない。

キリストの神性や奇跡を非難する人も、彼の高潔で汚れのない品性については、狂信者でない限り、これを否定する者はいないと聞いている。ユニテリアン教徒のように、キリストが救い主である理由は、単に彼の完全無欠な品性にあると信じる人がいるのも当然である。

高潔な品性が救いの力を持つことは、論を待つまでもなく明らかである。英雄には一種の電気力があり、彼に近づけば、彼の英気が我々に感染する。倫理学を講じるのではなく、生きた倫理に接する時は、真理の清流が我々に注入されるのを感じる。ソクラテスの最期の様子を読むたびに、釘で机に打ち付けられたように沈思黙考し、石像のように静粛であったベーコンがいる。護良親王の吉野籠城の記事を読み上げて、常に士気を鼓舞した藤田東湖がいる。万巻の書をもって教訓することができない粗暴な男でも、一度ラグビー校のアーノルド氏に接すれば、一生離れることのできない温雅な風を受けることがある。君子は実に生きた仏であり、歴史は生きた哲学である。

品性の模範として、キリストは最も完全なものである。人がもし絶え間なくキリストの品性を見つめ、彼に倣

おうと望むならば、ついには彼の完全であるように完全になることができる、と熱心に唱えるある種の宗教家がいる（ヘンリー・ドラモンド氏の演説集『The Changed Life』の編を読め）。キリストのようになりたいという願望こそ、キリスト教徒の最大目的である。そして、キリストを思い、キリストを学び、それによってますますキリストに似るに至ることは、疑う余地のない事実である。

しかし、私にはキリストのようになれない大きな原因がある。すなわち、私には罪というものが存在しており、いかなる感化力もこれを消滅させることができないのだ。私がまず罪から免れない限り、私はキリストのように考え、行動することはできない。キリストの心を私の心としたいと望むならば、まず私の心に大きな変化（性質上の）をもたらさなければならない。キリストの贖罪なくして人はキリストのようになれるというのは、石鹸と摩擦の作用によって黒人も白皙人種になれるというようなものである。キリストの救世の業は二通りあった。一つは人類に完全な生涯を教えるためであり、二つは人類の罪を彼の身に負ってそれを消滅させるためである。前者は救世の最終目的であり、後者は前者に導くための必要な手段である（ペテロの手紙第一　二章十二節）。完全な人を作ろうと望むならば、まず人を不完全にしている罪を除かなければならない。なぜならば、人はその罪から脱しない限り、罪を犯さないということにはならないからである。

では、なぜキリストの死と苦痛は、彼を信じる者の罪を滅ぼすのだろうか。世に言われる贖罪というものの哲理はどこにあるのだろうか。人は他人の苦痛によって、自分が犯した罪から免れることができるのだろうか。

この問題を考察しようとするにあたり、我々はまず、すべての善人は贖罪的な性質を持っていることを認めな

ければならない。人類は連帯責任をもって結びついている。一人の罪は人類全体がそれを感じ、一国の失政は万国の損害となる。私の兄弟が罪を犯して、私は責任がないと言うことはできない。私の同胞がもし他国民に損害を与えれば、国民は挙げてその責任を負わなければならない。罪なき者が罪ある者の罪を負わなければ、その罪は消滅しないというのは、世間一般の道理である。米国人が利欲の奴隷となり、人倫の綱を破り、奴隷制度を実行した時、義人ジョン・ブラウンはハーパーズ・フェリーの絞首台で罪のいけにえとして捧げられた。続いて五十万の生霊が硝煙と太鼓の音の中で贖罪の血を注ぎ、そして二千万の聖なる人々の祈祷と克己勉励の結果として、ようやく戦火が収まるに至った。怒りの神は、最終的な罪の代価として、国父エイブラハム・リンカーンの生血を求められた。しかし、内戦の余波は、これらの義人の流血をもってしても洗い清めることができず、南北は未だ怨恨の念を断ち切ることができなかった。兄弟が垣根の中で争っている時、剛直な愛国者ジェームズ・ガーフィールドが正義の犠牲となって狂人の毒手に倒れると、国民は初めて同胞相争うことの非を悟り、半世紀にわたる紛争は完全に跡を絶ち、公平な共和政治はアレゲーニー山脈の全長に沿って広く行き渡り、ミシシッピの清流は安らかに海に入るに至った。

オラニエ公ウィレムの尊い血は、実にオランダ共和国を狂王フェリペ２世の手から救ったものであり、オランダの三百年の隆盛は、実に彼の殉死の功績によるものと言わざるを得ない。これを小規模に見れば、一家に放蕩息子がいれば、父は彼のために憂いて腸を断ち、弟と妹は恥じて寝食を忘れ、そして母は煩悶やりきれず、心痛いや増して病気になり、苦慮の末についに愛児の名を口にして命を終える。岩石のような愚かな息子の心も初め

て解け、はっとして悔い改め、天の父の許しを乞うに至る。

無限の慈悲である神が、なぜ人の血を人から求められるのかは、深遠な秘密として存在するべきであるが、人を人と結びつけ、人類を推察的な組織体とするためには、この連帯責任こそが人類の最大の必要であることは、日を見るよりも明らかである。もしユニテリアン教が唱えるように、「人はそれぞれその荷を負うべきものであり、他人が彼の罪を負うべき道理はない」という教義が真理であるとしたら、なぜ罪のない黒奴は、熱心なガリソンの苦労を必要としたのだろうか。なぜ可哀そうな精神病者は、ドロテア・ディックス（どちらもユニテリアン教信者）の天使のような推察と勤勉を必要としたのだろうか。

そう、私は他人の罪を負うべきであり、他人は私の労を代わって引き受けてくれる（ガラテヤ人への手紙六章二節）。私はこれによって、私は私一人の私ではなく、我が身に人類全体の責任を負っていることを知る。私は私の隣人が受けるべき鞭を我が身に受け、隣人の痛みを減らすことができることによって、私は人としての無上の栄光を持っているのである。

人類社会は、実に義士仁人の功徳によって成り立っているようである。義人の適切な比率は、社会の存在に必要であるようだ。国家の滅亡は、策士の欠乏から来るのではなく、正義の者の数が足りないことから来るのである。神はアブラハムに告げて言われた、「もしソドムの町の中に五十人の義人を見つけたならば、その人々のためにその場所をことごとく赦そう」と。古来より今日に至るまで、徳が盛んで正義が行われている邦国が敗亡に帰したということは、我々がまだかつて聞いたことがないことである。

生命の父である神は、人類が完全に滅亡することを好まれないので、絶えず高潔な人を世に下し、その腐敗を癒し、その不浄を払い給うた。人類社会の生存は、実に絶え間ない精気の注入を必要とする。義人アベルが兄カインの毒手に倒れて以来、社会の腐蝕は、ただ義人の尊い血によってのみ止められてきた。そして、神が人類全体の大きな傷を癒やし、地球とこれに住む人々とを、全能の意志によって定め置かれた幸福な位置にまで引き上げようと期し給うや、神自ら肉体を取ってこの濁世に下り、無限の徳の源をここに開かれたという知らせは、愛である神の存在と、人と神との関係とを理解する者にとっては、決して信じ難い知らせではない。かつてギリシアの古哲が、彼の時代の腐敗を見て、「天の神自ら来て世を救うのでなければ、この世は決して救われない」と嘆いた言葉は、人性自然の表明と言わざるを得ない。世を救うためには、神の降世を必要とせず、義人や英雄の輩出で足りると信じる人は、国賊がはびこり、天の軍隊が威を振るわない時に、なおも天子の親征を不必要だと言う者と同じである。奸佞な者が国に蟠踞しており、聖天子は民を愛しておられる。御親征は民が熱望するところであり、また聖意の存するところである。節刀（せつとう）と錦の旗はすでに賊の肝を冷えさせている。天皇自らが陣に臨まれる。敵の全滅は、日を待たずに期待できる。

神は昔、預言者たちによって、多くの部分に分け、多くの方法で先祖たちに語られましたが、この終わりの時には、御子にあって私たちに語られました。神は御子を万物の相続者と定め、御子によって世界を造られました。御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。御子は罪のきよめを成し遂げ、いと高き所で、大いなる方の右の座に着かれました。御子

が受け継いだ御名は、御使いたちの名よりもすばらしく、それだけ御使いよりもすぐれた方となられました。

（ヘブル人への手紙一章一節―四節）。

無限の仁愛が世に臨んだ。その徳の流れは永遠に至り、この世が変化して天国となる基は、神の子イエス・キリストの降世によって開かれたのである。

人の贖罪力の多寡、すなわち効果の大小は、彼の品性の高低と、彼が身に引き受ける苦痛の厳しさとに正比例する。罪人がもし、その犯した罪の罰として適切な刑に処せられるならば、彼の苦痛は贖罪的な功績を持たず、誰も彼の刑罰によって積極的な利益を得ることはない。しかし、ここに窃盗罪を犯した者がいて、裁判官の不正からか、あるいは弁護人の不親切からか、強盗罪の罰を受けたとする。彼の刑罰は衆人の憐れむところとなり、その影響はついには裁判官あるいは弁護人の身に及び、彼らを不正不実を後悔させ、後日を慎み、二度と前の轍を踏まないようにさせる。この点において、不当な刑罰は他の罪人を不当な刑罰から救ったのである。

今、例を変えて、全く無罪の者が強盗罪の刑に処せられたとする。彼が裁判官や社会一般に及ぼす感化力は、前例の比ではない。さらに一歩進めて、この刑罰に処せられた者が、罪なき人であっただけでなく義人であったとする。彼の贖罪力は、彼の善行が顕著であったことと、彼が受けた刑が重かったことの比率で増加するものである。罪のない賤民が殺されて小役人が略奪を止め、義農・宗五郎が磔にされて佐倉の村民が虐政を免れる。会津藩の恭順は三家老の切腹を必要とし、維新事業の達成は甲東参議（板垣退助）の血をもって確固たるものとされた。ラティマーが焼き殺されて残忍なメアリー女王の勢力がたちまち衰え、ハンプデンが戦場で倒れてスチュ

アート家の衰運はすでに定まった。義人の死に勝る力は世に存在しない。死せる孔明が生ける仲達を走らせる。万軍をもって倒すことのできない虐王や奸臣も、義人の死によって倒れないことはない。罪は苦痛をもってのみ消滅し得る。血を流すことがなければ、罪の赦しはありません。（ヘブル人への手紙九章二十二節）

ある人は言うだろう、「神は無限の愛である。神が我々の罪を赦そうとするならば、贖罪の道を経なくても、彼の特権をもって我々を赦すことができる。我々親である者は、その子が罪を悔い改めて許しを請う時、すぐにその過ちを赦すのではないか。まして神においてをや。贖罪の事柄は、アジア的専制君主がその下民を罰しようとするにあたり、ある寵愛する家臣の仲裁と哀訴によってその罪を赦すのに類する処置であり、神に関するとても野蛮な思想と言わざるを得ない。単純で高尚な神の思想は、贖罪の迷妄を捨て去らなければならない」と。

本当にそうだろうか。我々親である者は、本当に理由なくして我々の子どもの過ちを赦すのだろうか。もちろん、まだ善悪の区別がつかない者の罪は、まだ罪と称すべきものではない。しかし、すでに罪が罪であることを知っている子が罪を犯した時は、適切な理由なくして彼の罪は赦されるべきではない。そして厳格な父は決してそうはしない。これは父たる者の威厳を保つために必要であるだけでなく、また子たる者の意志の自由を重んじるからである。理由なくしてその子の罪を赦す父は、その子を愛さない父である。彼がもし父たる者の特権をもって子を赦せば、その結果は一家の不始末となり、その子の公義心を鈍らせる。真の愛は慈悲と正義の結合である。我々が法律的な観念をもって、キリストの十字架の死を、人類の罪を赦すために神の公義を満足させたものと見なすに至ったことは、決して理由がないわけではない。

贖罪の適切な例として常に挙げられる事実は、ローマの歴史家ヴァレリウス・マクシムス（Valerius Maximus）の記事にかかるギリシア王ザレウコス（Zaleucus）の事跡であり、『天道溯源』の著者の筆によるものは次の通りである。

昔希臘王有二新例一作姦者無レ論二貴賤一必刺二其雙目一成レ瞽以爲レ罰不レ料定レ例後皇子偶犯二淫行一、王聞レ之不レ勝二憂慮一、若不二按レ例加一レ罰既恐下民有二伺レ親廢レ法之論一而民心上不レ服、若按レ例加レ罰、則已盲二其目一、不レ能レ臨二理天下一而社稷無レ主、事在二兩難一、不レ得レ已以二己之一目一、易二其子之一目一、上以循レ例、下以全レ情、夫皇子不レ得三苟免二於刑一、王猶爲レ之共受二痛楚一、既仁義之兩全、民自感二其德一、而服二其教一、

昔、ギリシャの王がある新しい法令を制定しました。それは、姦淫を犯した者は、身分の貴賤にかかわらず、必ず両目を刺し潰して盲目にする、という刑罰でした。ところが、法令が定められた後、図らずも皇子が然に淫行を犯してしまいました。王はこれを聞き、耐えきれないほど深く憂慮しました。もし法令通りに罰を加えなければ、庶民が「身内をかばって法律を廃止した」と議論し、民心が王に従わなくなるでしょう。かといって、もし法令通りに罰を加えれば、皇子は両目を失明してしまい、天下を治めることができなくなり、国家は君主を失うことになります。事態は、どちらを選んでも問題が残る「両難」の状況に陥りました。王は止むを得ず、自分の片方の目を、息子の片方の目と交換しました。これは、表向きは法令に従い、裏では情愛を全うするためでした。結局、皇子は刑罰から少しも免れることはできませんでしたが、王はそれどころか、皇子のために共に苦痛を受けました。こうして、仁愛と正義の両方を完全に満たしたため、国民は自

然と王の徳に感銘し、その教えに心から従ったのでした。

人類的であることを誇称する近頃のある神学者は、この種の事例をすでに時代遅れのものとし、法律的な贖罪論は道理に反する逆説として受け入れないに至った。我々はここに古説の弁護を試みる余地はないが、一つ読者の注意を乞うべきことがある。すなわち、いわゆる人類的思想の進歩は、ひいて法律的思想の緩慢を生み、愛と慈悲を混同し、愛を愛たらしめないに至ったことである。悪を憐れむと称して悪を憎まず、苦痛を見るに堪えない肉欲的な感情に支配されて正義を実行することに躊躇するのは、この 19 世紀文明の女性的な弱点であることは、識者のすでに認識するところである。一世紀前においては、貴族の猟場内で兎一匹を殺す者は死刑に処せられたという不情不義に反して、今では公然たる詐欺も白昼の盗賊も、証拠不充分の一言の下に無実の人となることができるに至った。これを現代人の法律的観念の鈍化と言わずして何と言おうか。

真の悔い改めは、厳格な法律の下にのみ起こり得るのである。罪の罰から免れようとするのは、真の悔い改めではない。法律的な償いが示されない限り、赦免の宣告に接してもそれを信じなかったルターやバニヤンの実直さは、放縦と寛容を混同する軟弱な神学者には推し量ることができないところであろう。これはヘンリー・マーチンが称する「寛大であるべきだが、キリスト教的ではない精神」であり、神の愛の深さと広さを理解する者とは言えないだろう。

「罪の赦し」とは、赦す者と赦される者との相互の働きから来るものである。赦される者は、ただ後悔の念をもってすべきだけでなく、悔い改めにふさわしい実（マタイの福音書三章八節）をもってしなければならない。

そして赦す者もまた、ただ心に赦すだけでなく、赦しを放つ実（贖罪）をもってしなければならない。悔い改めの実と赦しの実と両方が揃って初めて罪は赦されるのである。神は悔い改めの実を結ばない罪は赦されないのと同様に、我々も赦しの証明がない赦免は信じて受け入れることができない。これは我々の信仰が足りないことによるのではなく、我々に存する天与の理性が要求するところである。新約聖書が重きを神の契約に置くのもここにある。

そしてキリストの生涯並びに十字架上の死は、神が人類の罪を赦されることの証明である。すなわち、キリストの贖罪とは、神における罪の赦しという事実である。

そもそも贖罪の原理というものは、自然界の普通の道理である。鉱物界においては、これを動力の平均（Equilibration of Forces）といい、生物界においては治癒の働きとなって現れ、心霊界においては贖罪となるのである。空気中に気圧の希薄が生じた所があれば、四方の空気は平衡を得るためにこの所に向かって進入し、気圧が完全に平均を得て、気体の流動が初めて止まる。すなわち、濃い部分は、希薄な部分のために空気のいくらかを供したのである。

樹木はその一枝を失えば、全木がそのために苦しみ、各枝各葉はその養液のいくらかを放出し、損なわれた場所を癒そうと努める。そして、自覚の性質を持つ心霊界においては、援助と推察は道徳的義務として存在する。ゆえに、我々の中に一人の苦痛を感じる者があれば、社会全体は彼と共に苦しみ、我々の快楽のいくらかを減らして被災者を救わなければならない。社会の一部分の損害は、全体がそれを負担しなければならない。健康な部

分の犠牲によってのみ、病気の部分を治療することができるのである。人類は肉体をもって物質界と連続しているとはいえ、霊魂をもって心霊界の一部分を形作っている。神と天使と人類は霊界組織の構成員（Members of spiritual kingdom）である。ゆえに、人類の堕落と罪悪は、神と天使とに影響を与えないわけにはいかない。人類は救われなければならない。そして、これを救うものは、絶対無限の霊である神自らが人のために苦しまなければならない。

まことに彼はわれらの病（やまい）を負い、我々の悲しみを担った。

私がもし腕に大きな傷を負えば、私の心臓と胃と肺は異常な働きをしてこれを癒すように、地球表面の幾億万の人々の魂が死に瀕している時に、霊なる神は異常な働きをもって罪を贖わなければならない。これは奇跡のようであるが自然であり、異例のようであるが普通である。驚くべきであるが当然である。

もちろん、キリストの肉体上の苦痛は、彼の心霊上の苦痛を表したにすぎない。罪の赦しの恵みは、彼の神経的な痛みによって来るのではなく、心霊的な憂愁によって来るのである。ゴルゴタの丘ではなく、ゲツセマネの園こそ、人類の罪が贖われた所である。キリストにいばらの冠をかぶらせたものは私の罪である。彼に苦い杯を飲ませたものは私の罪である。彼を十字架に釘付けにしたものは私の罪である。カトリック教徒が常に十字架の形を身につけてキリストを思い、誠実なプロテスタント教徒の誰それが、常に十字架上のイエスの像を机上に置き、「お前の罪がキリストにこの苦痛を与えたのだ」と独り言を言って自分の罪を責めたというのは、迷信や邪説としてすべて排すべきではない。

あなたはなお私に尋ねて言うだろうか、「なぜ神は自ら苦しまなければ人を救うことができないのか」と。私はあなたに尋ねたい。なぜハワードは、彼の英国の住居に安居してヨーロッパの監獄を改良することができなかったのか。なぜリヴィングストンは、彼の故国において黒人のために熱心な祈祷を捧げるだけでアフリカを救うことができなかったのか。貧しい者に食物と衣服を与えずに「安心して行きなさい。温まりなさい。満腹になるまで食べなさい」と言う者である（ヤコブの手紙二章十五、十六節）。行いのない信仰は死んだ信仰であるように、贖わない罪の赦しは嘘である。キリストの十字架は神の愛の事実の証明である。

キリストの死によって、神は身を神に委ねる（Be-lieve, leave）、すなわち信じる者を赦すことができるに至った。神は赦したい者を赦すことができるに至ったのである（神は何事でも為し得るが、正義に合わないことは為し得ない）。ゆえにキリストは、人のためにのみ命を捨てたのではなく、神のためにも死なれたのである。キリストは血の流れる手を広げて人類に悔い改めを勧めると同時に、神をして人類の悔い改めを受け入れて彼らを赦す道を開いた。キリストの十字架は、実に恵みの新しい泉源を開いたのである。神はキリストによって、なお一層の神の愛をご自身で現わされた。キリストは言われた。

わたしが地上から上げられるときには、すべての人をわたしのもとへ引き寄せよう。

（ヨハネの福音書　十二章三十二し節）

もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。

（ヨハネの福音書十六章七節）

人類が神のもとに来ようとするのも、神が彼に来る者を受け入れようとするのも、まず神の子は十字架の死を受けなければならない。これこそ聖書の明白な教義であり、我々の理性と感情とが共に要求するところである。

ユニテリアン教並びに「新神学」が贖罪論に反対する最大の理由は、贖罪論は意志の自由を否定し、個人的責任を取り去るという点にある。

しかし、我々は意志の自由を否定しない。私をキリストに委ねるか委ねないかは、全く私の自由にある。私がキリストという言葉では言い表せない神の賜物を受けるか受けないかは、全く私の選択による。私が私の自由そのものをさえ完全に神に捧げるのも、これまた私の自由である。Our will is ours to make it thine（我々の意志は、それをあなたのものとするために我々のものである）。私の義をもって神の前に立つか、あるいは完全に私を殺して（Selbsttödtung）神の義をもって義とされるか、これもまた私の意志の自由をもって選ぶのである。私が歩行して東海道を上るのでなければ、私の意志によって上京したとは言えないだろうか。私は文明の恩恵に与り、我が身を機関車の操縦士に任せ、快楽と平安の中に短時間内に私の旅行を終えたからといって、私は私の意志の自由を失わないし、また怠惰や臆病をもって私を嘲る者もいないだろう。私は意志の決断によって、脆い私の意志と行いに頼らず、私の全身を挙げてキリストに任せたのである。私を私の旅行先まで送り届けたものは機関車の操縦士である。私を機関車の操縦士に委ねたものは私である。私を救い、私を天国に送り届けるものはキリストである。私をキリストに委ねたものは私である。これは聖書に言う信仰（依頼）をもって救われるとの意味であろう。ゆえに、贖罪の教義はそれを信じる者をして無責任たらしめるという批判は、全く根拠のない批判である。

また、贖罪の教義は道徳観念を排除すると言う人は、まだ贖罪の目的を理解していない人である。イタリアの山賊がアペニン山中で旅人を殺してその財貨を奪い、その後国法に処せられることを恐れ、ローマに行き、彼が強奪した財貨の一部を寺院に寄附し、教皇の捺印ある免罪状を受け取れば、警官は彼に手を触れることができなかった、というのは中世時代の昔話である。キリストの贖罪がもしこのようなものであれば、実に治安の大害物であり、一日も社会に存在するべきものではない。「キリストは私の罪を死をもって贖っておかれたから、私は善行をするに及ばず、また悪を行うも危険はない」と信じる人は、まだキリストの贖罪に与っていない人である。

それでは、どのように言うべきでしょうか。恵みが増し加わるために、私たちは罪にとどまるべきでしょうか。決してそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうしてなおも罪のうちに生きていられるでしょうか。

（ローマ人への手紙六章一、二節）

贖罪の目的は、私を完全な人とすることにある。そして私がキリストの贖罪に与ることになったのは、私が自ら努めて完全になることができないからである。ゆえに贖罪は道徳の終着点であり、道徳が終わるところ、それが宗教の始まるところである。宗教は道徳の上に建っている。道徳の粋、これを宗教というのである。初めにモーセの律法があって、後にキリストの恵みがある。まだ律法の厳格な綱をもって自らを縛ったことのない人は、キリストという解放者の恵みに与ることができない人である。

世に贖罪の教義をもって自己の不徳を隠そうとする者があるのは、実に嘆くべきことである。しかし、これが教義そのものの罪ではないことは、私が弁明を待つまでもなく明らかである。

高尚な真理は盲者の玩具となるのは誰もが知るところである。自由思想がフランス革命という悲劇を演じさせたという理由をもって排すべきではない。プロテスタント主義が三十年戦争の原因であったという理由をもって軽視すべきではない。キリストの贖罪は義を慕う者の憩いの場であって、悪人の隠遁所ではない。まず旧約的な厳重な道徳を教えずに、すぐに新約的な柔和な恵みを説く者は、自活の道を踏まない子どもに莫大な遺産を譲る愚かな父に倣う者である。このような子どもにして、怠惰で柔弱、無気力な者が多いのは、決して怪しむに足りない。しかし、謹直恭謙な子どもにして、誠意をもって父の志を継ごうと熱望するものに、厳格な父が幾億万の財産を与えるとしても、我々は父の不正を唱えず、また子の怠慢を懸念しないだろう。

世には天性の善人というものがいる。すなわち、生まれながらにして円満な性質を持ち、努めずに善良でいられる人をいう。ある人がかつてエマソンを評して、「彼は生まれながらの聖人にして、天啓宗教の助けを借りずに完全に最も近く達した人である」と言った。あるいは神聖なプラトン（divine Plato）のような者がいるかもしれないし、あるいは正直の権化である孔子のような者がいるかもしれない。これこそ、人はキリストの贖罪に与らずして完全に達し得ることの証明ではないだろうか。

この問題を十分に考察することは、この小さな著述ができるところではない。しかし、私はここに二つの注意を読者に促したい。すなわち、一つは、キリスト教的な善人には一種異様な特性が存在し、その温和さや優雅さはギリシア哲学も堯舜の遺訓も決して養い育てることができないこと、二つは、当時キリスト教国にありながら、キリスト教の恩恵に与らずして善人であり得ると誇る人は、大抵熱心なキリスト信徒の子孫であり、その人自身

は直接福音の感化に与っていなくとも、その父、その祖父、その曾祖父においては十分にキリスト教の感化を被っている者であること、である。

エマソンの父ウィリアム、祖父ウィリアム、曾祖父ジョセフ、五代目の祖ジョセフは、皆牧師の職を務めた人である。ウェンデル・ホームズはそのエマソン伝に、「エマソン家の血筋に牧師が多いのは著しい事実である」と述べている。このような祖先を持つエマソンにして、プラトンやシェイクスピアを尊崇することがキリストに勝っていたとしても、我々は彼にキリスト教的な君子の風格があったことを決して怪しまないだろう。もしエマソンがインドシナに生まれていたとしたら、彼の教育と思惟の傾向は、彼を決して「ニューイングランドの聖人」たらしめなかっただろうことは疑う余地がない。エマソンが福音的なキリスト教の庇護によらずしてキリスト教的な君子たり得たがゆえに、誰もが福音によらずして彼のように成り得ると信じる人は、今日の米国人が戦わずに独立自由の幸運にいるがゆえに、どの国民も改革の時期を経過せずして自由独立の国民たり得ると妄想する者と同じである。合衆国国民の今日の自由は、シモン・ド・モンフォール侯がイーブシャムの戦場に倒れて以来、ハンプデン、チャタム、ワシントンなど無数の英霊が血を注いで買い取ったサクソン民族の自由である。ユニテリアン教が見下して迷信や妄説と見なす贖罪の教義もまた、彼らの祖先を罪の苦しみから脱せしめ、心霊上無限の自由を与えた秘訣であったことを忘れるべきではない。エマソンはかつてこう言っている。

私はかつて私の肉体を私の魂の敵と思ったことはない。私は実に自然の子どもにして、スイカが夏の日に太陽の光線に当たって膨張するように、私も善良な自然の擁護の下に心楽しく生長するものだ、と。

パウロは言う。

善をしたいという願いは私にあるが、善を行うことができないことを、私は知っています。私は、したいと願う善を行わず、したくないと願う悪を行っています。もし私自身がしたくないことをしているのなら、それを行っているのはもはや私ではなく、私の内に住みついている罪です。こういうわけで、私は、善を行いたいと願うときに、私には悪が宿っているという原理を見いだすのです。すなわち、私は、内なる人としては神の律法を喜んでいますが、私のからだには異なった律法があって、私の心の律法と戦い、私を、からだにある罪の律法のとりこにしているのを認めます。私は、ほんとうにみじめな人間です。だれが、この死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか（ローマ人への手紙七章十八節―二十四節）と。

医師の熟練を最も強く感じるものは病者である。特殊な治療薬のために最も熱心に叫び求めるものは危篤の患者である。私の不完全極まりない性質は、私を救いの渇望せしめた。―ああ、神の奥義は深い。神は遺伝と境遇と天性と幸運の作用によって神の善人を造ることができるし、また遺伝に反し、境遇に逆らい、天性を曲げ、不運を転じ、罪人をも彼の子どもとなし得るのである。ある人がマホメットに尋ねて言った。

何が有で、何が無であるか。

答：神であり、世である。

誰が人で、誰が禽獣にも劣るものであるか。

答：信者であり、偽信者である。

何が最も醜くくで、何が最も美しいか。

答：信者の背信であり、罪人の悔い改めである。

もし哲学者ライプニッツが言ったように、「人類の堕落ほど人類を高めたものはない」とするならば、罪を犯した者ほど神の愛を感じるものはいないだろう。そうすると、罪を感じない者はキリストの愛の深さと高さと広さを感じ得ないのだろうか。読者よ、自らこの問いに答えよ。聖霊は直ちにあなたに教えるだろう。

読者は私に尋ねて言うだろうか、「キリストの十字架というものは推理法によって知るべからざるものであるというならば、あなたがこれを信じるに至ったことの何と遅かったことか。これは子どもでも信じ得る真理である。十数年前の昔、あなたが洗礼を受けた時、この単純な真理を信じることができなかったのか」と。

そう、読者よ、しかしあなたはまだ、人類は最も単純な真理を最も後に知るものであることを認めなければならない。万物は単純なものから複雑なものへと進むが、人の思惟のみは複雑なものから単純なものへと進むものなのだ。罪に沈んでいる人間は、外見の虚飾を好むものである。まず外を改め、然る後内に及ぼそうとするのは、普通人の常態である。私は社会風紀の改良に先んじて国家経済の増進に注目した。真率な信徒の養成に先んじて理想的なキリスト教会の設立を計画した。私の魂が救われない先に、聖人の行いをしようと努めた。しかし、自然の順序に逆らった方法の一つとして成功すべき道理はないから、私の策略はすべて失敗であった。そして失敗に失敗を重ね、失望に失望を加えた後、刀折れ矢尽きて、どうすることもできないに至った時、「この苦しむ者が

呼ぶと、主は聞かれ、すべての苦難から救い出してくださった」（詩篇三十四篇六節）。ああ、人は窮地に陥らなければ真理に来ないようである。私はかつて米国である武器製造所に行った際、その支配人である退役陸軍士官が私に近世の改良にかかる大砲小銃を説明してくれた時、私は彼に尋ねて言った、「君に聞こう、君は人類がいつ戦争を止めるに至ると思うか」と。彼真面目に私に答えて言った、「それならば、武器の改良が十分に進化し、戦場に出る者は敵も味方も一人も残らず打ち殺されるという恐怖を抱くに至らなければ、人類は戦争を止めないでしょう」と。我々が神のもとに帰るのもまた然りではないだろうか（ルカの福音書十五章を読め）。金のある人、知恵のある人、そう、徳のある人は、容易に十字架のイエスには来ないのである。貧しい人、無知な者、罪人、ああ、窮地に陥らなければ、キリストの宴会に侍る者はいないようである。

イエスは彼に言われた、「ある人が大きな饗宴を設け、多くの客を招いた。饗宴の時間に、しもべをその招いた人々のところへ送って、「すべてはもう用意ができたから、来てください」と言わせた。すると、彼らは皆、口を揃えて断った。その最初の者は彼に言った、『私は畑地を買ったので、行って見なければなりません。どうか、私を許してください』。また一人の者は言った、『私は牛を五組買ったので、それを試すために行きます。どうか、私を許してください』。また一人の者は言った、『私は妻をめとったので、これ故に行くことができません』。そのしもべが帰って、このことを主人に告げると、主人は怒ってそのしもべに言った、『急いで町の大通りや路地に行き、貧しい者、不具者、足なえ、盲人などをここに連れてきなさい』。しもべは言った、『主よ、お命じの通りにいたしました。しかし、まだ席が余っています』。主人はしもべに言った、

『道や垣根のあたりに行き、人々を強いて連れてきて、私の家を満たしなさい。私はあなたがたに告げる。あの招かれた人々は一人たりとも私の食事を味わうことはない』（ルカ伝14章16節から24節まで）

しかし、ああ神よ、あなたはなぜ私があなたを求めていた時に門を開いて私を迎えてくださなかったのか。私の路頭に迷った様は、あなたの憐れみを惹かなかったのか。私が真理を見ることができず、苦痛に苦痛を重ねていたのを見て、あなたは手をこまねいて傍観することに耐えられたのか。

恵みある声は答えて言う。神の忍耐は偉大である。彼は彼らの子どもが苦しむのを見て忍び得られる。神があなたを救わなかったのは、あなたを救おうと望んだからである。半生にわたるあなたの漂泊と煩悶は、あなたを自己の思いから解放させ、完全に私に頼らせるためである。あなたを苦しめたものはあなた自身である。私に寄りかかれ。私はあなたの罪を贖い、善から善へとあなたを導き、あなたを私のために世を救う力としよう、と。

私は答えて言う。

そうです、父よ、これはみこころにかなったことでした。　（マタイの福音書十一章二十六節）